

# 鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告

1990. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

# 鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告

1990. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

## は し が き

鬼虎川遺跡は、昭和50年に発掘調査が開始されて以来、ほぼ毎年調査が実施され、現在では32次に至っています。これらの調査では弥生時代から歴史時代（江戸時代）にわたる様々な遺構や遺物を検出し、石切地域の歴史を徐々にではありますが解明するに至っています。特に弥生時代には大集落を形成していたと思われ、集落に伴う柱穴、井戸や水田に伴う杭列・杭群が検出されていたり、集落の北ないしは北東にあったと思われる墓地では、方形周溝墓、土壇墓、壺棺、甕棺などが見つかっています。また、当時使用していた土器、石器、木器、骨角器、金属器、自然遺物など膨大な遺物が出土しています。今回刊行することができました鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告では、弥生時代中期前半の方形周溝墓が見つかりました。埋葬主体部も残っていて、木棺の構造、仰臥葬という埋葬形態など当時の鬼虎川遺跡における埋葬方法、墓地の築造方法に一資料を加えることができました。これらの成果が、弥生時代研究の一助になるとともに、広く活用されることを心から願うものであります。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々、関係諸機関に感謝の意を表するとともに、今後とも一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

平成2年3月

財団法人 東大阪市文化財協会  
常務理事 塚田氏秀

## 例 言

1. 本書は、東大阪市西石切町5丁目185番地で行われた上水道管敷設工事に伴う鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市水道企業管理者島田勲の委託を受けて実施した。
3. 現地調査は、平成元年4月27日より平成元年6月7日まで実施した。
4. 事務局の体制は以下のとおりである。(平成2年3月1日現在)  
常務理事 塚田氏秀  
常勤理事 佐藤幸治  
事務局長 室田和彦 (東大阪市教育委員会文化財課長)  
事務局付 河本 正 (東大阪市教育委員会文化財課主幹)  
調査部長 原田 修 (東大阪市教育委員会文化財課主査)  
庶務部長 下村晴文 (東大阪市教育委員会文化財課主査)  
庶務副部長 芋本隆裕 (東大阪市教育委員会文化財課主任)  
調査副部長 福永信雄 (東大阪市教育委員会文化財課主任)  
調査副部長 勝田邦夫 (東大阪市教育委員会文化財課)  
庶務部 安藤紀子 (東大阪市教育委員会文化財課)  
調査部 上野節子 (財団法人東大阪市文化財協会)  
調査担当 勝田邦夫  
現地調査並びに整理作業にあたり、中切孝彦、西田浩孝、別所秀高、島村和宏、西川昌宏、山西純一、小路克子の尽力があった。
5. 現地の土色及び土器の色調は、農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠し、記号表示もそれにしたがった。
6. 本書の執筆および編集は勝田が行った。第IV章は大阪市立大学医学部解剖学第二講座多賀谷昭氏に鑑定を依頼し、執筆していただいた。また、出土木棺材の樹種同定及び花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託して実施した。
7. 図版に収めた遺構写真は、勝田、中切が撮影した。
8. 調査の実施にあたっては、東大阪市水道局計画課、工務課、大阪府道路公社の御協力を頂いた。記してお礼申し上げます。



# 本文目次

はしがき

例言

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
1. 層位	4
2. 遺構	6
3. 出土遺物	10
IV. 附編	12
1. 鬼虎川遺跡第31次調査出土人骨について	12
2. 鬼虎川遺跡第31次調査出土の木棺材樹種同定及び花粉分析報告	12

# 挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 層位図	5
第4図 方形周溝墓盛土	5
第5図 方形周溝墓実測図	6
第6図 主体部実測図	7～8
第7図 周溝内層位図	9
第8図 遺物実測図	11
第9図 花粉分析結果	16
第10図 試料24における花粉化石群集の組成	16

## 図版目次

図版 1		調査地航空写真
図版 2	遺構	1. 方形周溝墓検出状況 2. 遺物出土状況
図版 3	遺構	1. 周溝内遺物出土状況 2. 周溝断面
図版 4	遺構	1. 主体部検出状況(全景) 2. 主体部検出状況
図版 5	遺構	1. 主体部断面 2. 木棺蓋板検出状況
図版 6	遺構	1. 主体部全景 2. 人骨検出状況
図版 7	遺構	1. 調査地断面 2. 調査地断面
図版 8	遺物	1. 弥生土器壺・甕・蓋 2. 弥生土器底部
図版 9		木棺材顕微鏡写真
図版 10		花粉顕微鏡写真

## I. 調査に至る経過

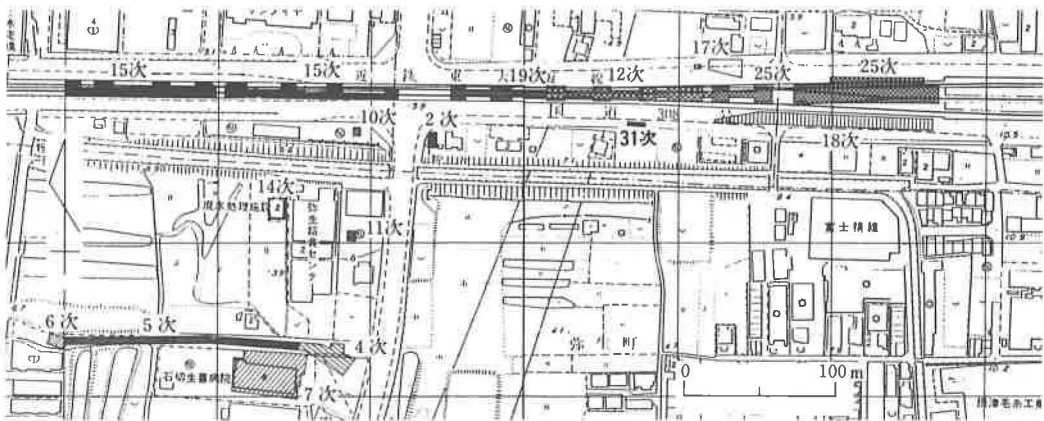
鬼虎川遺跡は、東大阪市西石切町5丁目、7丁目、弥生町、宝町を中心に東西約640m、南北約850mと推定される縄文時代から歴史時代（江戸時代）にかけての複合遺跡である。

昭和38年、府道大阪外環状線（現在の国道170号）建設工事に伴う水道管敷設に際して、地表下約2mの黒色粘土層から弥生土器、石器が、昭和41年11月に組み合わせ式木棺の底板が発見されたことにより遺跡として知られるようになった。昭和50年、国道170号線沿いでガス管理設工事に伴う調査が実施されてから、ほぼ毎年発掘調査が実施されており、今回の調査で第31次を数える。

今回の調査は、東大阪市西石切町5丁目185番地で水道管敷設工事が計画された。工事は国道308号線の整備計画の一環として、近畿日本鉄道東大阪線新石切駅以西の道路敷内に、ガス管、水道管、電話線、電気ケーブルなどを一括して設置する共同溝が建設されており、この共同溝に接続するための管を埋設するというものであった。西石切町5丁目付近は、周知の鬼虎川遺跡の範囲内にあたり、これまでの周辺の調査結果からも当然遺構、遺物が検出されることが明らかな地域であった。

このため、東大阪市水道企業管理者は、東大阪市教育委員会に対して、土木建築工事施工届、埋蔵文化財発掘通知書を昭和63年9月30日に提出した。これにもとづき、東大阪市教育委員会は昭和63年12月6日に試掘調査を実施した。この結果、地表下約3.1mの第7層に明緑灰色粘土のブロックが混っており、人為的な盛土と考えられた。また木棺材らしき板材を確認し、方形周溝墓と考えられた。この試掘結果により協議を行ったが、工事の掘削深度を変更することができないため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、第二阪奈有料道路建設に伴う道路切り替えの問題もあり、関連事業として平成元年4月27日より実施し、同年6月7日まで延26日間現場作業を行い、遺物整理は、平成元年5月6日から平成2年3月31日まで行った。



第1図 調査地点位置図

## II. 位置と環境

鬼虎川遺跡は、東大阪市西石切町5丁目～7丁目、弥生町、宝町に所在する縄文時代から歴史時代（江戸時代）にかけての複合遺跡である。

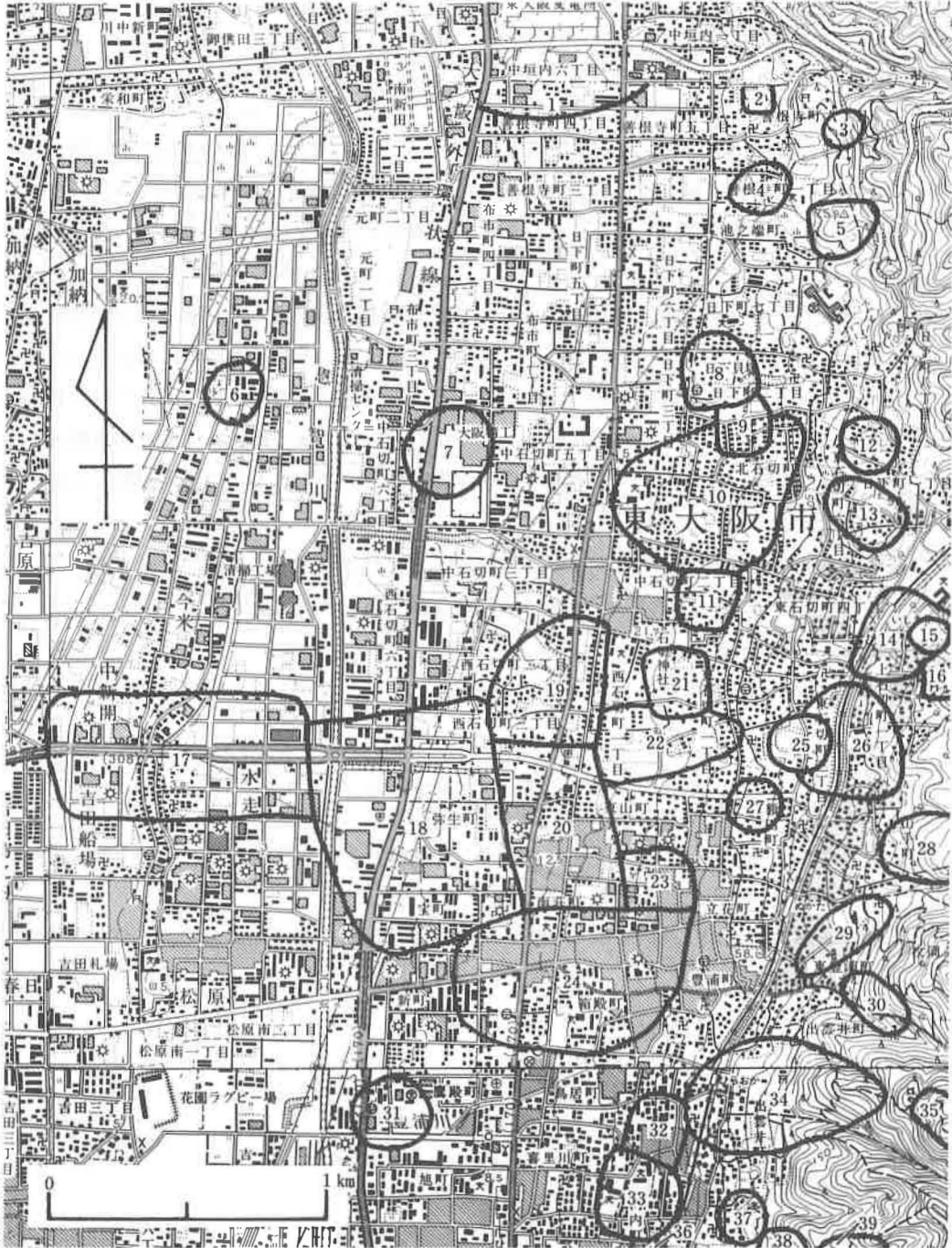
本遺跡の立地は、生駒山西麓にひろがる扇状地の性格をもつ中位段丘末端から河内平野の低湿地にかけて、標高3～10mにある。

鬼虎川遺跡の周辺地域で生活が開始されたのは旧石器時代で、日下、芝坊主山、千手寺山、正興寺山、山畑などの遺跡でナイフ形石器及び尖頭器が出土している。旧石器時代から縄文時代の過渡期では、神並、草香山、日下、六万寺などの遺跡で有舌尖頭器が出土している。

縄文時代では、早期の神並遺跡、中期の善根寺遺跡、後期の日下、縄手遺跡、晩期の日下、芝カ丘、鬼塚、馬場川遺跡がある。これらの遺跡は、生駒山西麓の段丘上、標高15～80mに位置する。本遺跡でも東端、縄文時代前期の縄文海進時の汀線と考えられる崖付近で前期～中期初頭の土器や獣骨、西端の水走遺跡と接する地点で終末期の長原式土器と弥生時代前期の土器が共伴して出土している。この地点は河内湖の東辺にあたる低湿な場所である。長原式と弥生時代前期の土器を出土する遺跡が本遺跡の南東にある。鬼塚遺跡である。この遺跡では中期末から晩期の土器が出土しており、前代から引き続いて人々が生活をしてきた所である。

弥生時代では、中垣内、和泉、高井田、瓜生堂、山賀といった標高1～7mの低地を中心に集落が営まれる。本遺跡では、幅5m、深さ1.2～1.5mの環濠に囲まれた集落、環濠の東側では方形周溝墓、土壙墓、木棺墓といった墓地域、西側では杭などで護岸された水利施設をもった水田などが広がっていたものと考えられる。しかし、中期末になって衰退し後期には廃絶してしまう。鬼虎川遺跡周辺の環境は、うっそうとしたカシ・シイの照葉樹林に近接してイネ科やカヤツリグサ科の生育する沼沢地があり、その近くで稲作が行われていたというものである。弥生時代後期にはイネ型花粉の出現はみられないが、アカガシ亜属、シイノキ属の花粉が著しく高い出現率を示すことから、照葉樹林は存在していたことは明らかであり、遺跡の放棄が単なる自然環境の変化によるものではないことを示している。弥生時代後期では芝カ丘、西ノ辻、鬼塚、皿池、縄手、北鳥池、上六万寺、馬場川、若江、上小阪といった遺跡で生活の様子がうかがえる。

古墳時代では、馬場、日下、芝カ丘、辻子谷、神並、西ノ辻、鬼塚、縄手といった扇状地、新家、西岩田、意岐部、西堤、岩田、瓜生堂、小若江、池島東といった沖積平野で集落が営まれているが概して規模の小さいものが多い。鬼虎川遺跡では、遺跡の北東部で古墳時代中期後半から後期にかけての溝、掘立柱建物、柵列などがみつまっているが、遺跡の大部分を占める低湿地では集落として利用されることがなく今日に至っている。中位段丘面上では、歴史時代に入り、鎌倉～室町期に、掘立柱建物、井戸、溝、土坑といった遺構、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、漆器、石製品といった当時の生活がうかがえる遺物が出土している。



- |            |            |            |              |             |
|------------|------------|------------|--------------|-------------|
| 1. 中垣内遺跡   | 2. 足立氏館跡   | 3. 善根寺山遺跡  | 4. 善根寺遺跡     | 5. 池端遺跡     |
| 6. 加納遺跡    | 7. 和泉山遺跡   | 8. 日下古墳    | 9. 石蔵寺跡、馬場遺跡 | 10. 芝ヶ丘遺跡群  |
| 11. 辻子谷古墳群 | 12. 正法寺山遺跡 | 13. 芝山古墳   | 14. 千手寺山遺跡   | 15. 藤尾古墳群   |
| 16. 辻子谷古墳群 | 17. 水走遺跡   | 18. 鬼虎川遺跡  | 19. 植附遺跡     | 20. 西ノ辻遺跡   |
| 21. 法通寺遺跡  | 22. 神並遺跡   | 23. 額田寺遺跡  | 24. 鬼塚遺跡     | 25. 正興寺山遺跡  |
| 26. 神並古墳群  | 27. 若宮古墳群  | 28. 額田山古墳群 | 29. みかん山古墳群  | 30. 豊浦谷古墳群  |
| 31. 鶴立遺跡   | 32. 孤塚遺跡   | 33. 皿池遺跡   | 34. 出雲井古墳群   | 35. 神津嶽祭祀遺跡 |
| 36. 河内寺跡   | 37. 水走氏館跡  | 38. 客坊庵寺   | 39. 客坊城跡     |             |

第2図 遺跡周辺図

### III. 調査の概要

調査地点は、鬼虎川遺跡の範囲内では北東端に近い位置にあたり、昭和56年以来実施されてきた近畿日本鉄道東大阪線建設工事及び国道308号線拡幅工事に伴う発掘調査で、弥生時代中期の方形周溝墓、土墳墓、溝などが発見された地点に隣接している。このため同様の遺構が発見されることが予想された。

調査は31.19m<sup>2</sup>を対象として実施した。試掘調査を実施する前にすでにH鋼が10本南北約3mの間隔をあけ東西方向に打たれていた。まず盛土約1.2mを機械掘削し、以下2.55mについて各層ごとに人力掘削により遺物・遺構の検出作業を行った。掘削深度が進むにつれて常にH鋼間に木矢板を入れながら作業を進める状態であったため方形周溝墓の盛土、周溝を除き断面を残すことができなかった。また東側に隣接する共同溝側からの湧水、土砂の流入が激しく非常に調査が困難な状況にあった。

今回の調査地は、国家座標第VI座標系で東端がY = -32,924.500、西端がY = -32,933.900、北端がX = -146,722.400、南端がX = -146,724.800である。

#### 1. 層位

調査地点の層序は、南壁断面をもとにして行った。以下、確認した土層を列挙した上で特徴を記す。

第1層 盛土

第2層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 砂質シルト

第3層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘質シルト 須恵器片が少量出土した。この下面で方形周溝墓を検出した。

第4層 灰黄色 (2.5Y7/2) 中砂～細礫 方形周溝墓築造当時の地表面であるがかなりの凹凸がある。

第5層 オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト～微砂

第6層 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘土

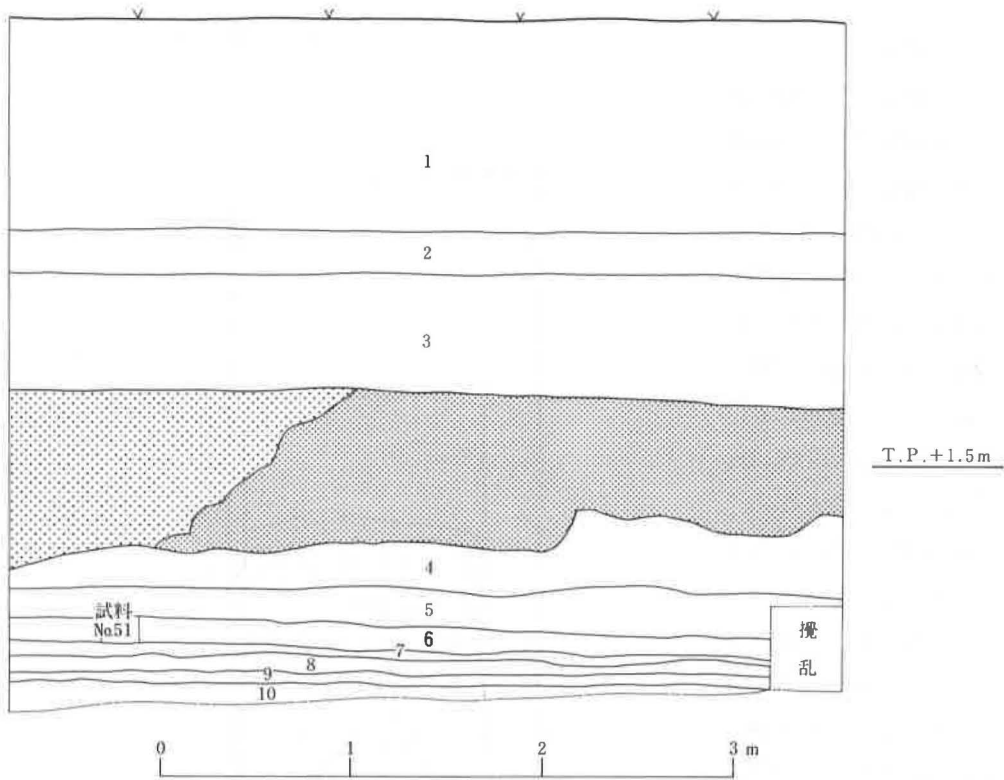
第7層 黒色 (7.5Y2/1) 粘土

第8層 灰色 (10Y4/1) 粘土

第9層 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘土

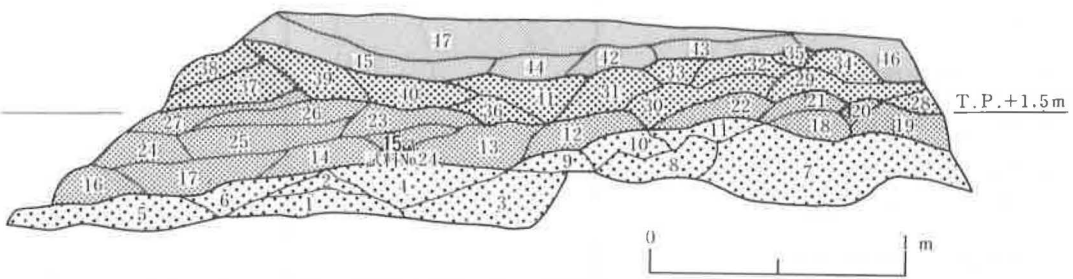
第10層 黒色 (7.5Y2/1) 粘土

第5～10層は弥生時代中期以前の堆積層で、第6層の花粉分析の結果シダ類胞子が多く見られることから湿原～草原の環境にあったものと考えられる。また、第5層上面に盛土された土ではアカガシ亜属、コナラ亜属などが多くみられ、鬼虎川遺跡の東にそびえる生駒山地にアカガシ亜属が卓越する森林植生が考えられる。しかし、鬼虎川遺跡周辺は、シダ類胞子、カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属が示すように草原的な環境が優越するが低湿なところもみられた



- |                         |                       |                |    |
|-------------------------|-----------------------|----------------|----|
| 1: 盛土                   | 5: オリーブ灰色5GY5/1微砂~シルト | 9: 緑灰色7.5GY5/1 | 粘土 |
| 2: 暗オリーブ灰色2.5GY3/1砂質シルト | 6: 暗オリーブ灰色5GY3/1粘     | 10: 黒色7.5Y2/1  | 粘土 |
| 3: オリーブ黒色10Y3/1粘質シルト    | 7: 黒色7.5Y2/1          |                |    |
| 4: 灰黄色2.5Y7/2中砂~細礫      | 8: 灰色10Y4/1           |                |    |

第3図 層位図



- |                       |                          |                          |                        |
|-----------------------|--------------------------|--------------------------|------------------------|
| 1: 黒5Y2/1細礫粘質シルト      | 14: 黒5Y2/1細砂混粘質シルト       | 26: 黒5Y2/1細礫粘質シルト(礫少ない)  | 39: 黒5Y2/1細礫粘質シルト      |
| 2: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト     | 15: 黒5Y2/1粘質シルト(試料No.24) | 27: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト       | 40: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト     |
| 3: 黒5Y2/1細礫粘質シルト(礫多い) | 16: 黒5Y2/1細礫~砂混粘質シルト     | 28: オリーブ黒5Y3/1砂混シルト      | (黒7.5Y2/1粘土ブロック入る)     |
| 4: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト     | 17: 黒5Y2/1細礫~砂混粘質シルト     | 29: 黒5Y2/1砂混粘質シルト        | 41: 黒5Y2/1細礫粘質シルト      |
| 5: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト     | 18: 黒5Y2/1砂混粘質シルト        | 30: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト       | 42: 黒5Y2/1細礫混砂質シルト     |
| 6: 黒5Y2/1中礫~砂混粘質シルト   | 19: 黒10YR1.7/1細礫混粘質シルト   | 31: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト(礫少ない) | 43: 黒褐色2.5Y3/1細礫混砂質シルト |
| 7: 黒5Y2/1中礫~細礫粘質シルト   | 20: 黒10YR1.7/1細礫~砂混粘質シルト | 32: 黒5Y2/1細礫~砂混粘質シルト     | (礫少ない)                 |
| 8: 黒5Y2/1細礫混シルト       | 21: 黒5Y2/1シルト            | 33: 黒5Y2/1礫混シルト          | 44: 黒2.5Y2/1細礫混砂質シルト   |
| 9: 黒5Y2/1細礫粘質シルト(礫多い) | (灰5Y5/1粘土ブロック入る)         | 34: オリーブ黒5Y2/2細礫混粘質シルト   | 45: 黒2.5Y2/1細礫混砂質シルト   |
| 10: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト    | 22: 黒5Y2/1・灰5Y5/1粘土      | 35: 黒7.5Y2/1粘土           | (礫少ない)                 |
| 11: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト    | 23: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト       | 36: 黒5Y2/1細礫~砂混粘質シルト     | 46: 黒褐色2.5Y3/1細礫粘質シルト  |
| 12: 黒5Y2/1・灰5Y5/1砂混粘土 | 24: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト(礫少ない) | 37: 黒10YR1.7/1細礫~砂混シルト   | 47: 黒2.5Y2/1細礫粘質シルト    |
| 13: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト    | 25: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト(礫少ない) | 38: 黒5Y2/1細礫混粘質シルト       |                        |

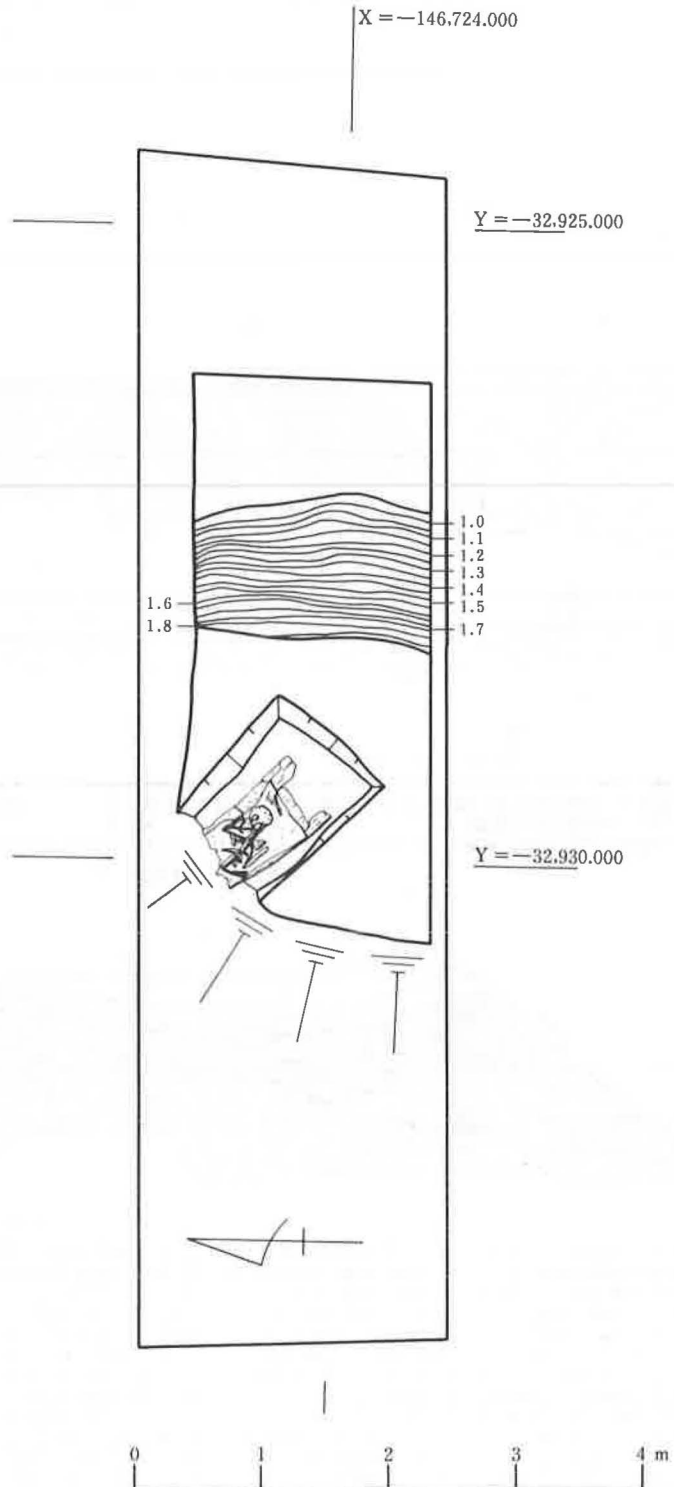
第4図 盛土

ようである。

## 2. 遺構

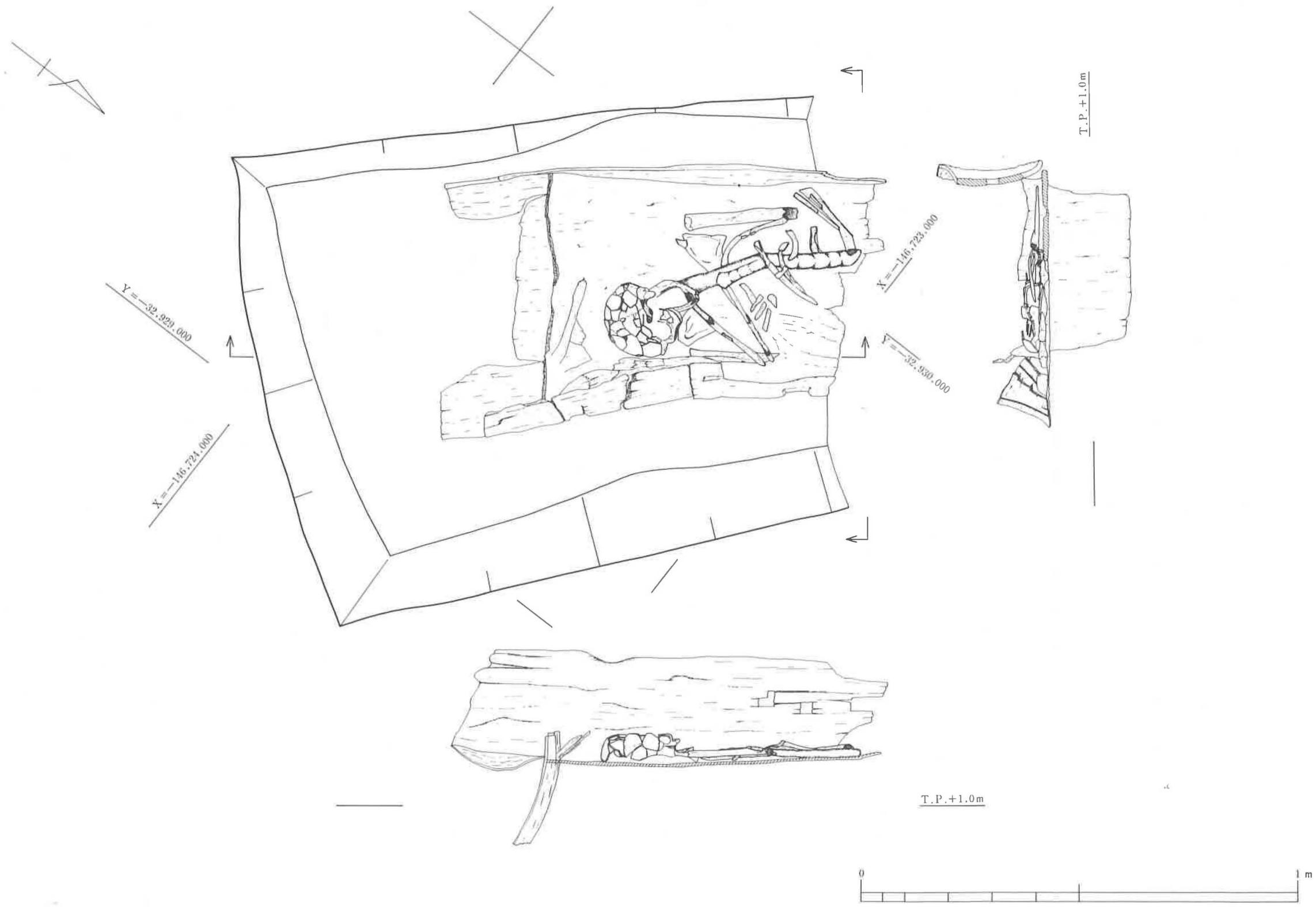
第3層下面で方形周溝墓1基を検出した。東側周溝、墳丘の一部分と埋葬施設を検出した。北辺、南辺は調査区外に延び、西辺も試掘坑で攪乱され明確ではないが調査区外にあるものと思われる。墳丘の規模は東辺で2.4m以上としか判明しない。東側周溝の幅は1.9m以上、深さ0.95mである。

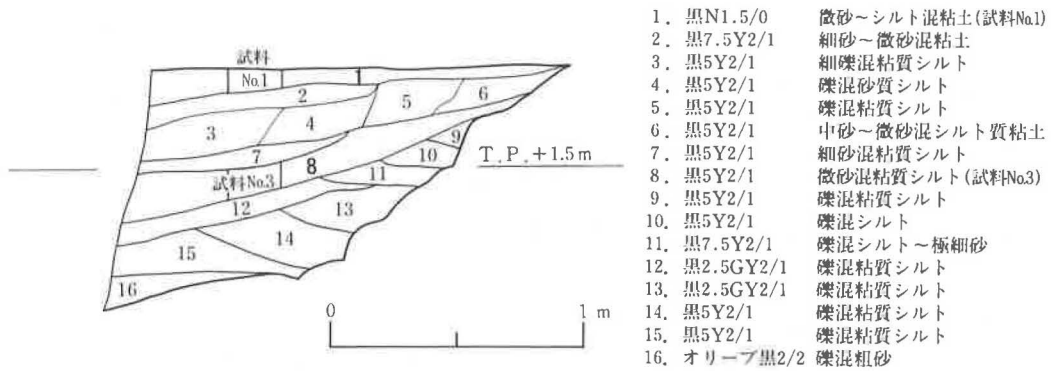
方形周溝墓の頂部は現地地表下1.95m、T.P.1.9mである。墓を造る前の地表面は第4層灰黄色中砂～細礫層でかなりの凹凸がみられる。調査地内では東側が18～25cm低くなっていて、まず水平になるように1～6の土を入れた。地盤整地が終わった段階で方形周溝墓のほぼ中央付近から徐々に盛土していったと考えられる。盛土層は0.6～0.8mの厚さが確認されたが大きく4層に分けられる。最上層は細礫を多く含んだ黒色(2.5Y2/1)あるいは黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトで厚さ6～24cmある。45、47は水平方向に長く



第5図 方形周溝墓実測図







第7図 周溝内層位図

のび最後の仕上げとして形を整えるために積み上げたように見える。上層は細礫を含んだ黒色(5Y2/1)あるいはオリーブ黒色(5Y3/1、5Y2/2)シルトで厚さ10～25cmある。中層は細礫混り黒色(5Y2/1、10YR1.7/1)粘質シルトで9～32cmの厚さがある。中央部で薄く、周辺部で厚い傾向がある。中央部がやや凹んでいるが、ほぼ水平に近い形に整えられている。下層は細礫を多く含んだ黒色(5Y2/1)粘質シルトで厚さ7～32cmある。これは、先述したように当時の地表面を水平に整えるためのものと、そこからの中心部分の基底部の盛土からなる。

さて、この盛土に使用した土がどのあたりから運ばれたかであるが、近辺での調査例を見れば、まず第12次調査<sup>(1)</sup>が北約20mの地点で実施されている。ここでは方形周溝墓の遺構面になっている第23層黒色(10YR1.7/1)粘土があり、北東約25m地点(第12次調査地点に隣接する)で実施の第19次調査A地区第12-U層<sup>(2)</sup>に対応する。第12次調査では周溝墓、土坑の遺構面となっており、上部で第II様式に属する弥生土器が出土している。すぐ東に隣接する第30次調査<sup>(3)</sup>では第9層黒色(10Y2/1)粘土が方形周溝墓の遺構面となっており、今回の盛土に近い色調と質であると思われるため、近辺の土を採取したものと考えられる。

埋葬施設は北西側半分が既存の工事(H鋼が打たれていた)により破壊されていて南東部分のみが残存していた。木棺は盛土上面から掘り込んだ長方形の土壇に納められていた。木棺の遺存状態はよくないが、蓋板、南西側側板、南東側小口板、北東側側板の一部、底板が残っていた。木棺の構造は、底板の両短辺側を「コ」字形に切り取ってそこに「T」字形に加工した小口板を埋め込み立てるもので、この小口板を挟むように両側板が底板の上に立てられていた。部材はそれぞれ1枚板を使用しており、大きさは、蓋板が幅72cm、現存長105cm、側板が幅26cm、現存長98cm、小口板が上面幅41cm、下面幅33cm、現存長28cm、底板が幅63cm、現存長97cmである。木棺の推定内寸は、幅56cm、深さ25cm、長さ140cmぐらいであろう。側板以外は腐蝕が著しい。小口板は直立ではなく内側へ約17～18度傾斜している。同様の事例は鬼虎川遺跡第12次調査第5号方形周溝墓第1主体部木棺で両端の小口板が約11度傾斜している。これは当初から意図して行なわれたというよりは土圧により内側に入り込んだ可能性が高い。

木棺の主軸はS-36°-Eで墳丘の東辺と40°の角度を生じる。墳丘の東隅で検出されているこ

となどから考えると主たる埋葬施設が他にあると考えられる。

### 3. 出土遺物

31次調査で出土した遺物は、第3層オリーブ黒色粘質シルトから須恵器片3片、周溝からサヌカイト片1片、方形周溝墓の盛土、主体部埋土、周溝から弥生土器が出土した。出土量はコンテナに約1箱ぐらいである。出土量は、方形周溝墓盛土第3層が一番多く以下周溝、盛土第4層、主体部埋土、盛土第2層、同第1層の順となる。ほとんどが細片であり図化できるものをすべて掲載した。

出土した弥生土器の器種は、甕、甕蓋、壺で、鉢、高杯はみられない。

甕 口縁部が外反する倒鐘形の土器である。1、2とも張りの少ない体部とゆるやかに「く」の字形に外反する口頸部をもつ。口縁端部は面をもつようにやや角ばって終わる。口縁部はヨコナデを施すが、体部内外面ともヘラミガキ、ハケメなどはみられない。体部外面には煤の付着がみられる。胎土には、角閃石、長石、石英、金雲母の微粒を多く含む。

壺 口縁部が外反するがあまり大きく開かず、比較的短い口頸部をもつ壺である。6は口縁端に1条の沈線を施している。口頸部外面には、まず細いタテハケの後に原体5条(8.5mm)の櫛描直線文を時計回りに5帯以上施している。口縁部はヨコナデである。7の口縁部はヨコナデ、5の口縁部外面はヨコハケである。

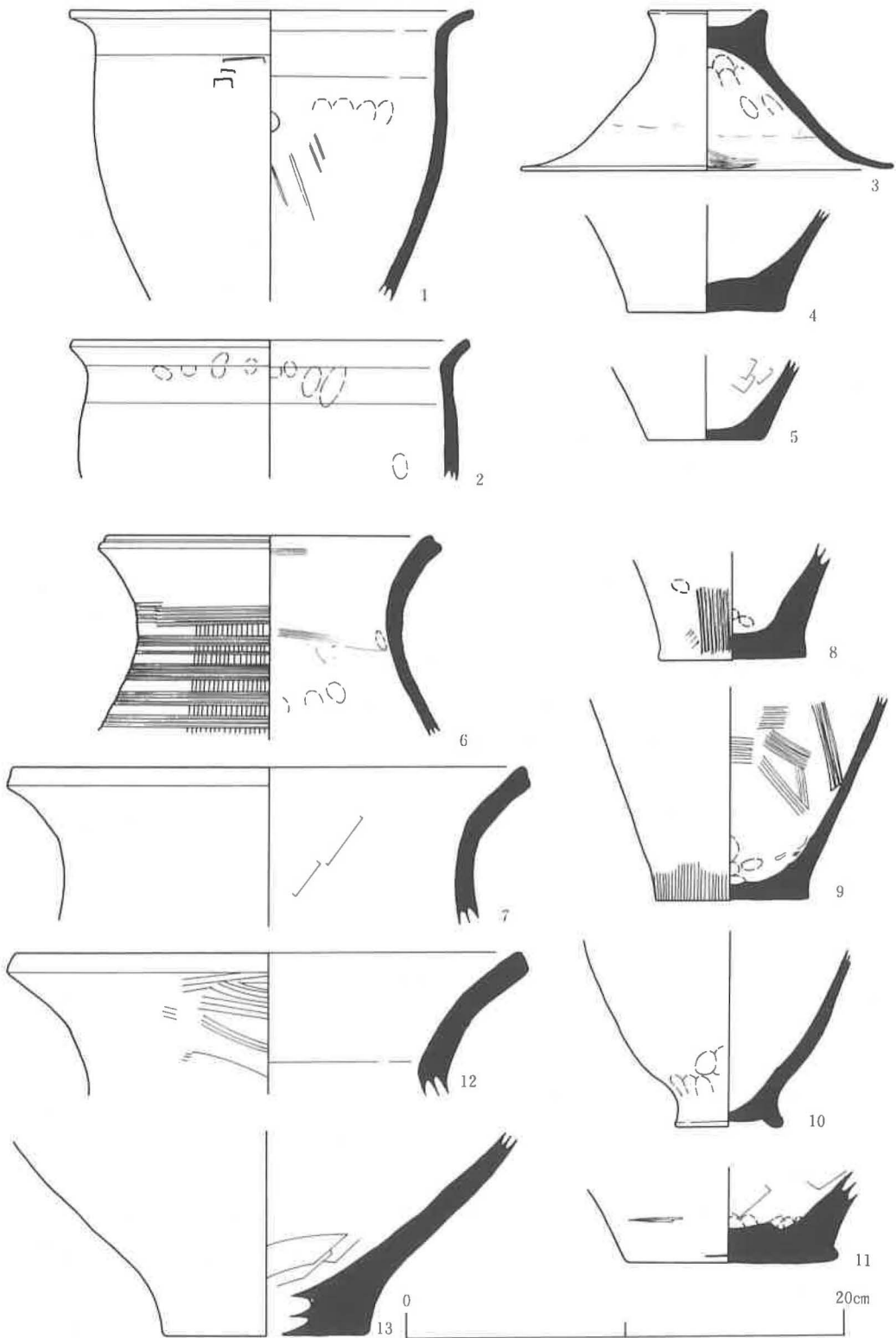
甕蓋 笠形の器体をもつ土器である。口縁部は大きくそり、つまみの部分は突出するが、平底ではなく凹面を呈して上げ底ふうになっている。口縁部内面にハケメがみられる。口縁部をめぐって内側1.7cm、外面0.8cm幅の環状に煤の付着がみられる。胎土に角閃石を多く含むほか、石英、長石を少し含む。

土器底部 4、5、8、9、10は甕底部、11、13は壺底部である。4、8は厚い平底に直線ぎみに斜上方に立ち上がる体部をもつ。4の底部外面は指圧痕が目立つ。8の外面はタテハケ(下→上 9本/1.1cm)で仕上げる。5の底部器壁は薄く、内面はヨコハケで仕上げる。9は内外面ともハケで、外面は細かいタテハケ(下→上 12本/1.1cm)、内面は粗いヨコハケ(右→左 6本/1.4cm)である。10は目立って突出した上げ底である。内外面とも剝離が著しく調整法は不明である。胎土に長石、石英の石粒を多く含む。11は厚い平底の底部に斜外上方に開く体部をもつ。底部周縁に沿ってユビオサエによる指頭圧痕が多くみられる。内面はヨコハケ(右→左)、外面は風化のため明らかではない。12は上げ底ぎみの厚い底部から斜外上方に開く体部をもつ。内外面とも風化しているが内外面ともヨコハケ(右→左)と思われる。

注(1)上野利明・才原金弘他『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1987年

(2)福永信雄・菅原章太『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1988年

(3)下村晴文『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会 1988年



第8图 遺物実測図 (1~5 周溝 6~11 墳丘盛土 12~13 主体部埋土)

## IV. 附 編

### 1. 鬼虎川遺跡第31次調査出土人骨について

大阪市立大学医学部解剖学第二講座 多賀谷 昭

弥生時代中期前半の方形周溝墓から、南東を頭位として木棺に埋葬された人骨1体が出上している。上半身のみが残っており、保存状態が不良で土圧による変化や風化が著しいため、復原して精査することはできなかったが、以下に述べるように、かなり高齢の女性と推定される。

残存部位としては、頭蓋骨では脳頭蓋のほぼ全部と顔面の上半、上顎歯槽の一部、それに下顎骨が存在するが、左の眼窩側壁が欠けている。歯は検出されていない。脊柱では胸椎および腰椎の椎体のみが残っている。胴骨で他に残存するものとしては、左の中位肋骨の破片が3本ある。上肢骨では、左右の肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨の他、おそらく左の中手骨ないし基節骨と思われるもの3本と、左のものと思われる鎖骨が残存するが、何れも骨端を欠いている。

出上時の骨の位置関係については、脳頭蓋は左側頭部を上にして下顎骨もこれとほぼ関節する位置にあり、他の多くの骨もほぼ埋葬時の位置を保っていると考えられる。例外は、鎖骨が左胸部の中位に移動していることと、左手のものと推定される右胸部中位にある3本の骨が、腰部に達している左の橈骨と尺骨の遠位端と大きく離れていることである。骨の配置から、この人骨は仰臥位で埋葬され、顔をやや右に向け、右腕は肘を屈曲して手を胸に置いた状態であったと推定され、左腕も右腕と同様の形を取っていた可能性がある。

性別については、外後頭隆起や上項線の発達が良いことは男性的であるが、乳様突起が比較的小さく、乳突上隆線の発達もごく弱いので、女性と判定した。年齢については、冠状縫合、矢状縫合ともブレグマ付近で内板は完全に閉鎖して外板も閉鎖に近い状態にあり、また、残存する歯槽がいずれも閉鎖し、下顎骨全体に退縮がみられるので、熟年以上と推定され、老年である可能性が大きい。

### 2. 鬼虎川遺跡第31次調査出土の木棺材樹種同定及び花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### 1. 木棺材の材の同定

試料 試料は、弥生時代中期前半のものとする方形周溝墓の主体部中の木棺の小口板・北東側板・南東側板・底板・蓋板の5点である。

方法 剃刀の刃を用いて試料の木口・柀目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラル(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版9)も作製した。

結果 蓋板はコウヤマキに、他の4点はヒノキ属の一種に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata*) スギ (コウヤマキ) 科

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1～5細胞高。コウヤマキは、通常コウヤマキ科に独立させる(1科)1属1種の日本特産の常緑高木である。自生地は本州(福島県以南)・四国・九州に点在し、また植栽される。材はやや軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度であるが耐水性がある。各種樽桶類・土木・舟材・棺材などの用途がある。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

考察 棺材にコウヤマキを用いる例は、古墳時代とされる遺物を中心に報告例が多い(山内1973, 島地・伊東1988など)。この用材は、「日本書紀」の須佐之男命の指示にも一致するとし、適材を適所に使用した例とされるなど(例えば、満久1983)、あたかも木棺=コウヤマキ製という式が成立するかのようにならされてきた(亘理1968など)。そして、その他の樹種が用いられている場合には、何か特別な事情があってコウヤマキが使用できなかったのではないかとされることすらあった(松田1982a, 1982b)。しかし、筆者は布谷(1988)の指摘するように、こうした傾向は、弥生時代後期から古墳時代の近畿地方にのみ当てはまることであって、他地域はもちろん、近畿地方にあってもより古い時代では当てはまらないことではないかと考えている。試料は弥生時代中期前半のものとされているが、コウヤマキは蓋板にのみ用いられ、本体にはすべてヒノキ属が使われている。同じように蓋板のみにコウヤマキの用いられている例としては弥生時代とされる山賀遺跡(その2)第1号方形周溝墓主体部出土木棺の例がある(松田1982a)。また、コウヤマキとヒノキ(属)の組合せは、同時代中期後半のものとされる巨摩廃寺遺跡第2号方形周溝墓第1号埋葬施設検出の木棺でも知られている(松田1982b)。ヒノキ属の場合は針葉樹であることから、加工のしやすさやその香り、色調などから選択されたものとするのもできよう(満久前出, 布谷前出など)。しかし類例は少ないものの、ケヤキ[鬼虎川遺跡第2号方形周溝墓主体部(弥生時代中期, 島地・林・伊東1987)]、クスノキ[巨摩廃寺遺跡J地区第2号木棺(弥生時代後期, 松田1982b)、瓜生堂遺跡第101号方形周溝墓1号木棺(弥生時代, 嶋倉1981)]やシイノキ・カツラ[山賀遺跡(その3)(弥生時代, 嶋倉1984)]という広葉樹の出土例もある。上記のように、木棺=コウヤマキ製という式は弥生時代中期ご

ろまでは成り立たない可能性がある。また、今後多数の試料が得られたとしても、即座にこの問題が解決されるとは限らないが、近畿地方にあっても、木棺=コウヤマキという関係が弥生時代中期以前にも成立すると結論付けることには慎重であるべきと考える。

## 2. 花粉分析

試料 試料は、方形周溝墓の断面から採取された4点である(第3、4、7図)。No.1・No.3は周溝埋積土、No.24(方形周溝墓盛土)・No.51(地山)は方形周溝墓築造以前の堆積物とされている。

分析方法 分析は、以下の方法で行った。湿重約10gの試料について、HF処理→重液分離(ZnBr<sub>2</sub>:比重2.2)→アセトリシス処理→KOH処理の順に物理・化学処理を行い試料中の花粉・胞子化石を分離・濃集する。その後、グリセリンで封入、光学顕微鏡下で観察し種類の同定・計数を行う。

結果は一覧表、各種類の相対的な出現率を示す花粉化石群集の組成図として示した。その際の出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は不明花粉を除く総花粉・胞子数をそれぞれ基数として、百分率で求めた。

結果 各試料の分析結果を第9図に示した。No.1・3・51の3点の試料からは、処理後の残渣全てを観察したものの、統計処理を行うのに十分な花粉・胞子化石数は得られなかった。また、花粉・胞子化石の保存状況も良くなかった。一方、No.24では多数の花粉・胞子化石が検出された。ただし、そのうち約30%が保存状態の良くない同定不能な化石(不明花粉として扱った)であった。この不明花粉を除く花粉化石群集の組成(第10図)は、照葉樹のアカガシ亜属が高率に産出し、次いで落葉広葉樹のコナラ亜属が多産する。このほかニレ属一ケヤキ属や針葉樹のコウヤマキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科が多い。

考察 方形周溝墓の盛土であるNo.24の花粉化石群集は、照葉樹のアカガシ亜属の高率出現で特徴づけられる。このような花粉化石群集は、鬼虎川遺跡19次調査時に行われた花粉分析結果のうち、弥生時代中期以降の地層においても認められる(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)。大阪平野では約7,000年前から6,000年前にかけてアカガシ亜属の卓越する植生へ変遷し、それ以後、現在まで同様な森林が成立してきたとされている(前田, 1980)。本層における花粉化石群集もまた、このようなアカガシ亜属が卓越する時期の植生を反映している可能性が高い。ただし、その年代は本層が盛土であるため本来の堆積層準を特定できず、いつ頃の森林植生を反映しているかは不明である。No.24以外の3点の試料では、統計処理を行うのに十分な化石数は得られなかった。この原因については、各堆積層の堆積過程が不明なので推定することは困難であるが、いずれの試料もシルト・粘土を主としていることから、花粉・胞子がおおよそシルト粒子以下の微細な粒子と挙動を共にし流失したとは考え難い。花粉化石の保存状況が良くなかったことからすれば、堆積後の土壤微生物や化学的な酸化によって分解したこと、あるいは堆積速度が速く取り込まれる花粉数が少なかったことなどに起因するものと思われる。いずれにしても、これらの試料の植生については推定することは困難である。

#### 引用文献

- 満久 崇壽 1983 「木のはなし」、思文閣出版、京都、238pp.
- 松田 隆嗣 1982a 山賀(その2)遺跡出土木製遺物の樹種について、「山賀(その2)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—本文編—」、(財)大阪文化財センター、113-134.
- …………… 1982b 瓜生堂・巨摩庵寺遺跡出土木製遺物の樹種について、「巨摩・瓜生堂近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター、361-384.
- 布谷 知夫 1988 埋葬具、「島地・伊東(編)日本の遺跡出土木製品総覧」、雄山閣、72-73.
- 島地 謙・林 昭三・伊東 隆夫 1987 鬼虎川遺跡より出土した棺材の樹種、「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」、(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会、45-48.
- …………… 伊東 隆夫(編)1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」、雄山閣、296pp.
- 嶋倉 巳三郎 1981 瓜生堂遺跡から出土した木製品の樹種、「瓜生堂遺跡Ⅲ(本文編)」、瓜生堂遺跡調査会、325-330.
- …………… 1984 山賀遺跡(その3)の出土木製品の樹種について、「山賀(その3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター、413-428.
- 眞理 俊二 1968 木器、「大場・内藤・八幡(監修)新版考古学講座1通論、<上>」、雄山閣、144-160.
- 山内 文 1973 植物遺存体の研究法、考古学ジャーナル、80:20-25.
- 前田 保夫(1980) 縄文の海と森、蒼樹書房、pp.238.
- バリノ・サーヴェイ(未公表) 鬼虎川遺跡19次調査採取試料の花粉分析.

## V. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期前半の方形周溝墓1基を検出した。方形周溝墓の規模や主体部の数は調査範囲が限られていたこと、西側が攪乱されていたことから明らかにすることができなかった。しかしながら、埋葬方法、墓地の築造方法が判明した。方形周溝墓の墳丘東辺はS—4°—Wを示し、木棺の主軸S—36°—Eと40°の角度を生じる。埋葬された人骨は老年の女性と思われ、仰臥位で埋葬され、顔をやや右に向け、右腕は肘を屈曲して手を胸に置いた状態であった。頭位はS—58°—Eであるが脊椎骨の方位はS—41°—Eであった。木棺は、底板の小口部を「コ」字形に切り取りそこに「T」字形の小口板を外接して立て、この小口板を挟むように側板を底板の上に立てる構造であった。これと同様のものは鬼虎川遺跡第12次調査第2号方形周溝墓第2主体部、同第5号方形周溝墓第1主体部、鬼虎川遺跡第30次調査第7号方形周溝墓第1主体部、山賀遺跡8号墓木棺、瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓5号木棺、同第9号方形周溝墓1号木棺があり、福永伸哉氏分類のI—b形式にあたる。

鬼虎川遺跡の方形周溝墓は、主体部が確認されておらず不明確なものを含めて今回の調査で22基を数える。この中で主体部が検出され、頭位が明確なものは12基13体(周溝が埋ったあとの溝内埋葬を除く)である。頭位は北東方向をとるもの7体、南西方向のもの3体、南東方向のもの3体となる。今回の主体部は墳丘の南東角近くに当たるものと思われ、既存の第12次調査第5号方形周溝墓に似た形態をとるものと考えられ、主体部が複数になる可能性がある。山賀遺跡ではII様式の主体は1墳丘1主体で、巨摩庵寺でも1墳丘1主体が多くみられる。瓜生堂遺跡Ⅲ～Ⅳ様式にかけてのものは第2号方形周溝墓にみられるように複数の埋葬例が多くみられる。これらのことからII様式の後半期から複数埋葬例が増加する傾向にあるものと考えられるが今後の事例の増加を待って再検討したい。

注(1)上野利明・才原金弘他『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1987年

(2)下村晴文『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会 1988年

(3)西口陽一・宮野淳一・上西美佐子『山賀(その3)』財団法人大阪文化財センター 1984年

(4)今村道雄他『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会 1981年

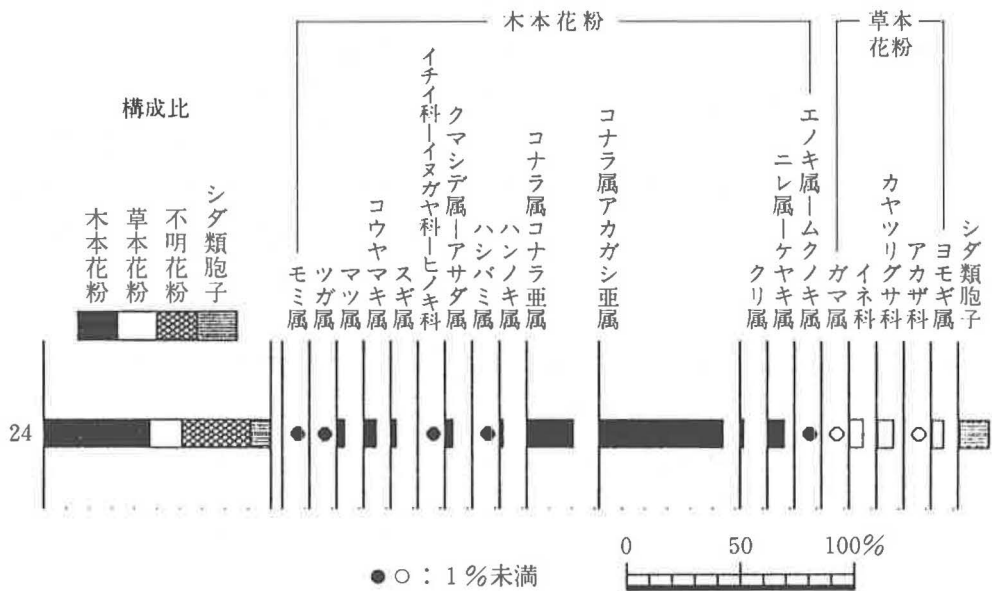
(5)福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会 1985年

(6)玉井功・井藤暁子・小野久隆他『巨摩・瓜生堂』財団法人大阪文化財センター 1982年



種類(Taxa)	試料番号	No. 1	No. 3	24	51
木 本花粉					
モミ属		-	1	1	-
ツガ属		-	1	1	-
マツ属		-	2	5	1
コウヤマキ属		1	-	8	-
スギ属		4	1	3	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	1	-
クマシテ属-アサダ属		1	1	5	-
ハシバミ属		-	-	1	-
ハンノキ属		-	-	2	-
コナラ亜属		2	1	31	-
アカガシ亜属		2	7	83	1
クリ属		-	-	2	-
ニレ属-ケヤキ属		-	7	11	-
エノキ属-ムクノキ属		-	-	1	-
ツタ属		-	2	-	-
草 本花粉					
ガマ属		-	1	2	-
イネ科		13	26	13	-
カヤツリグサ科		3	-	17	1
アカザ科		-	1	1	-
アブラナ科		1	1	-	-
アオイ科		-	1	-	-
オミナエシ属		-	1	-	-
ヨモギ属		1	3	12	-
不明花粉		14	5	99	8
シダ類孢子					
シダ類孢子		22	13	31	46
合計					
木本花粉		10	23	155	2
草本花粉		18	34	45	1
不明花粉		14	5	99	8
シダ類孢子		22	13	31	46
総花粉・孢子		64	75	330	57

第9図 鬼虎川遺跡第31次調査試料における花粉分析結果

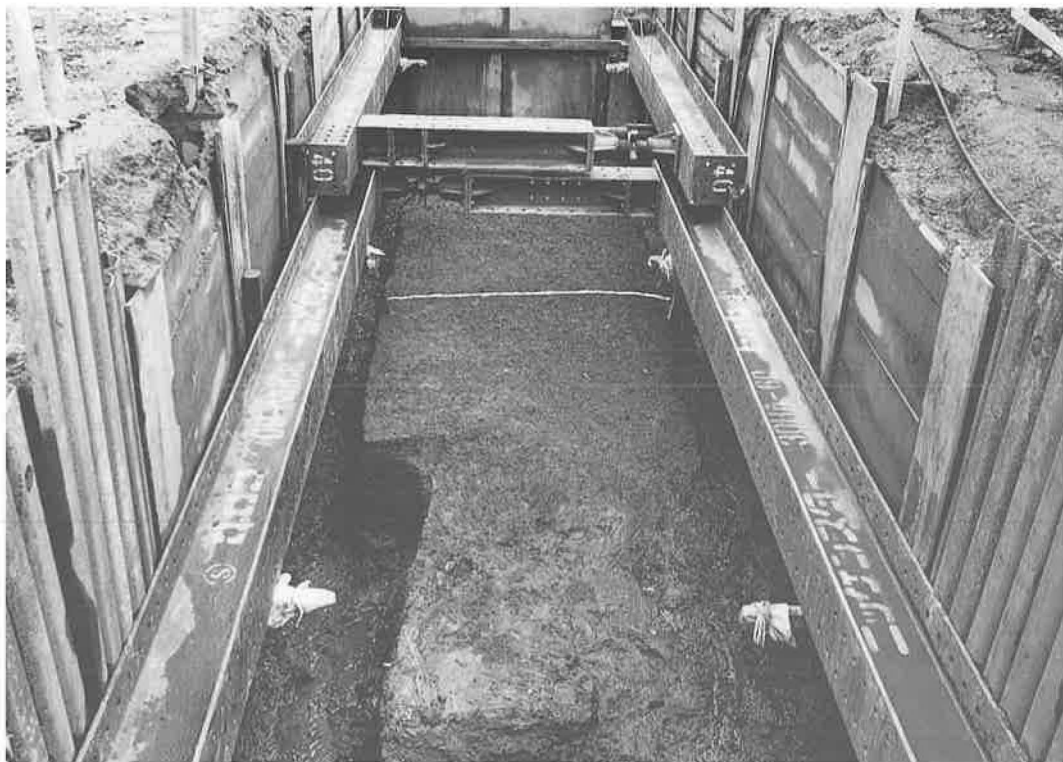


第10図 鬼虎川遺跡第31次調査試料24における花粉化石群集の組成

# 圖 版

図版1 調査地航空写真





1. 方形周溝墓検出状況



2. 遺物出土状況



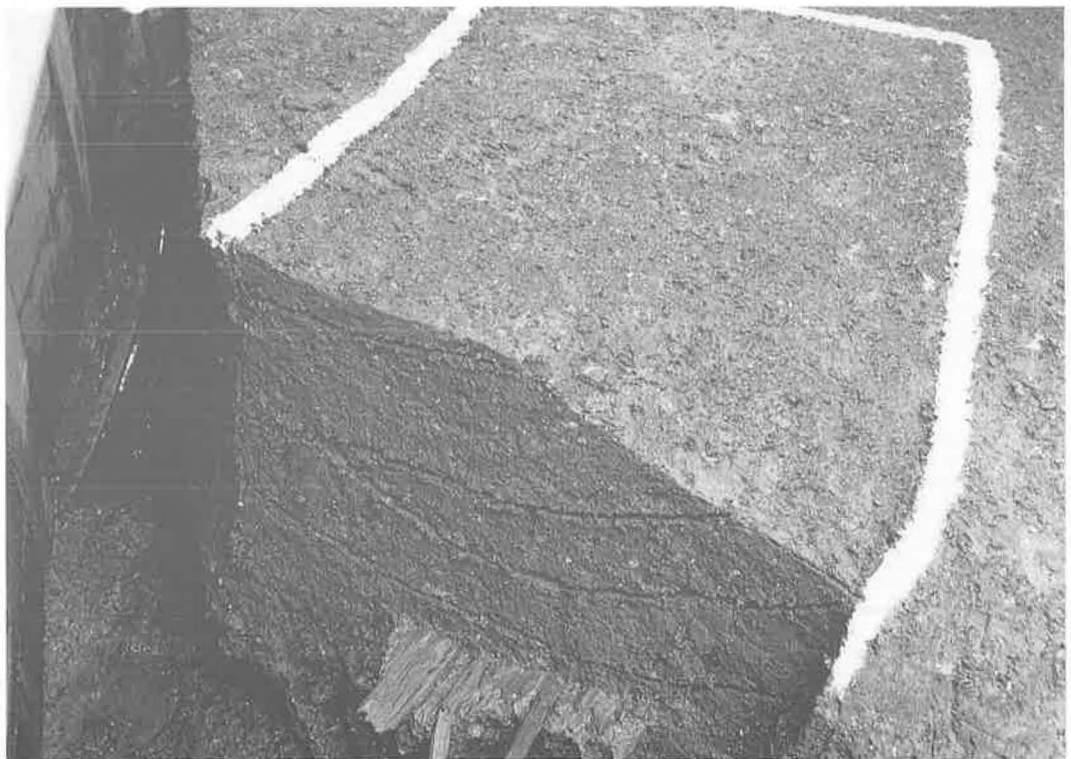
1. 周溝内遺物出土狀況



2. 周溝断面

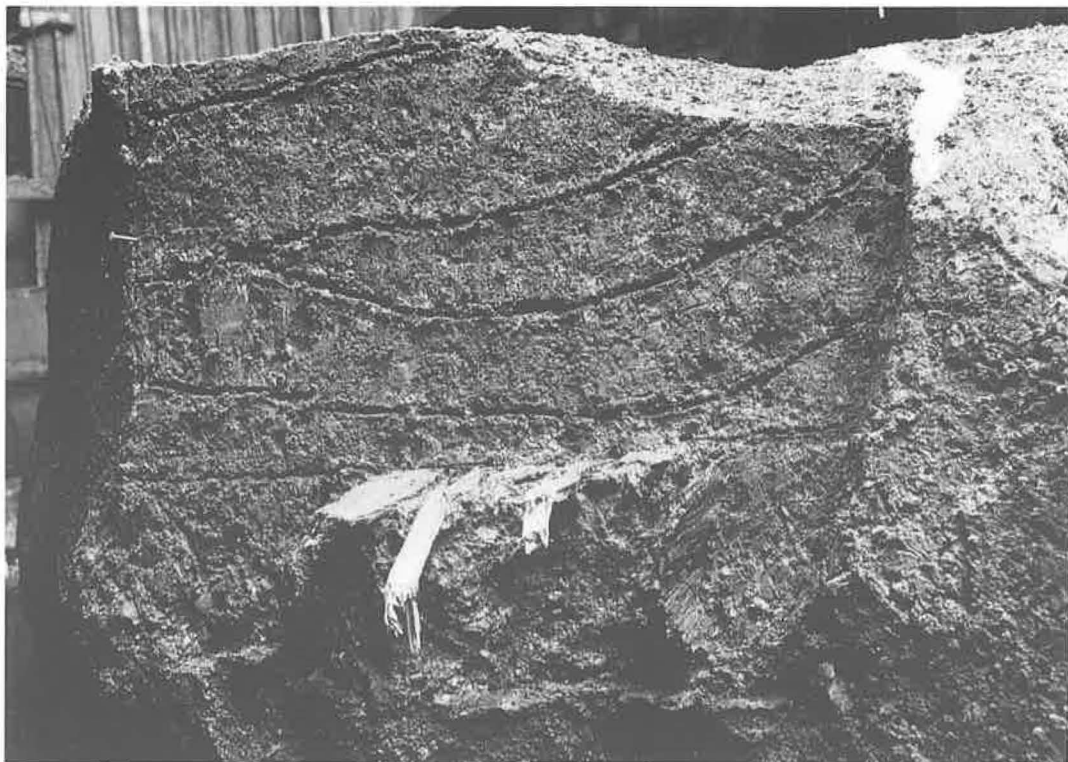


1. 主体部検出状況全景



2. 主体部検出状況





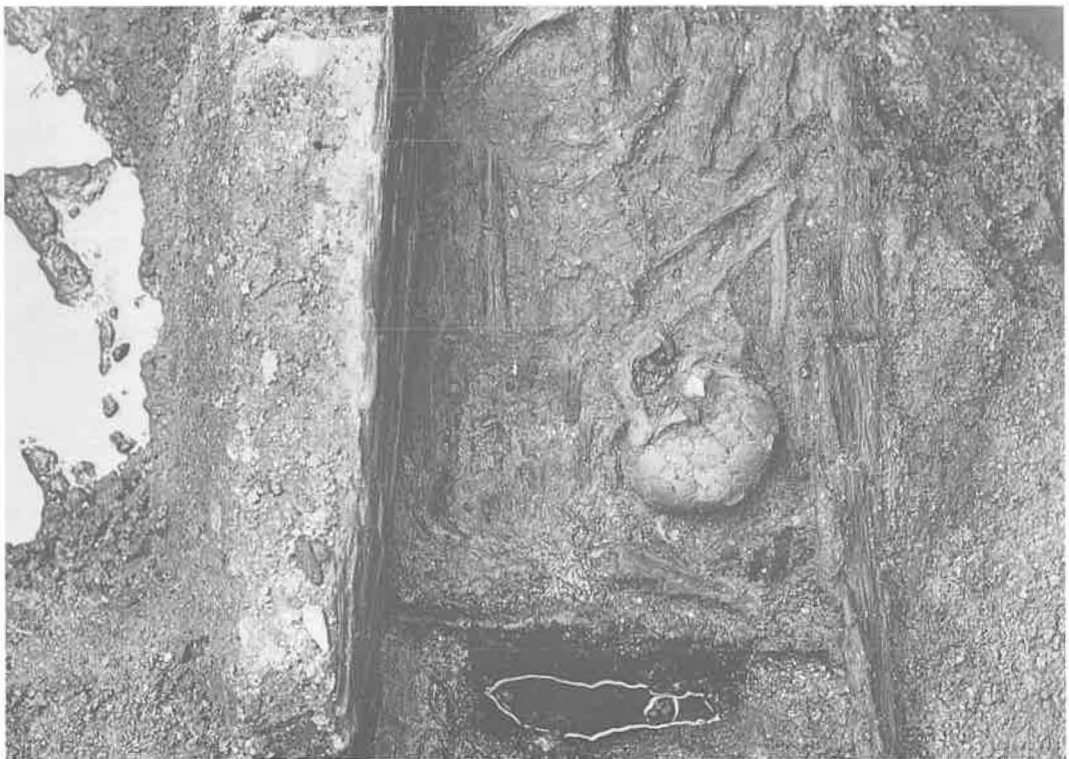
1. 主体部断面



2. 木棺蓋板検出状況



1. 主体部全景

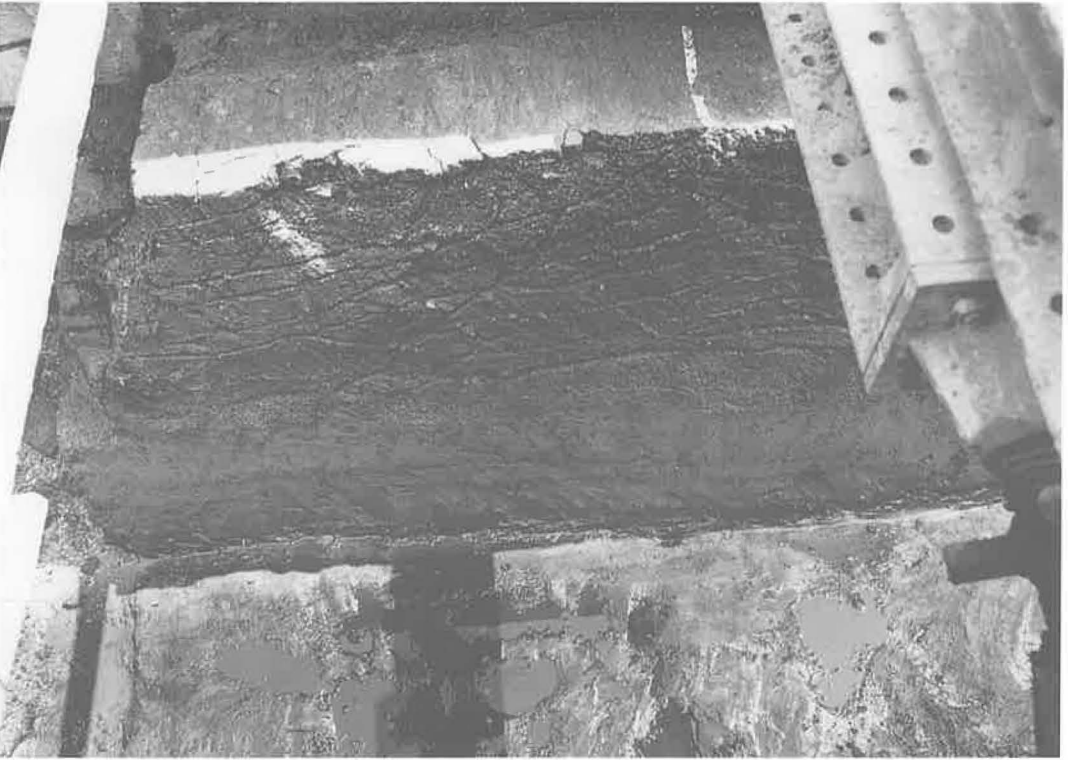


2. 人骨検出状況

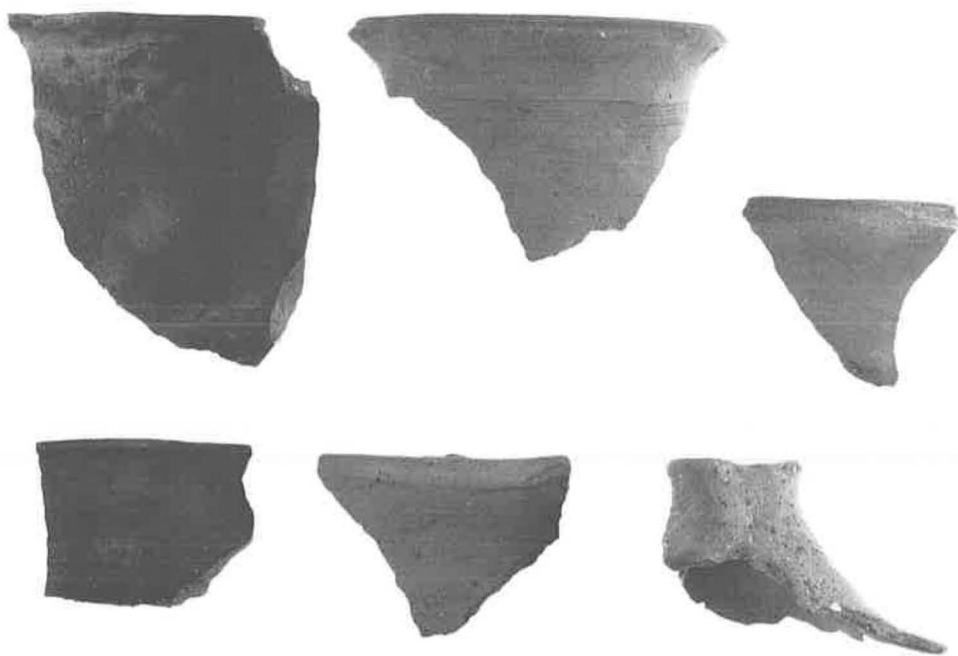




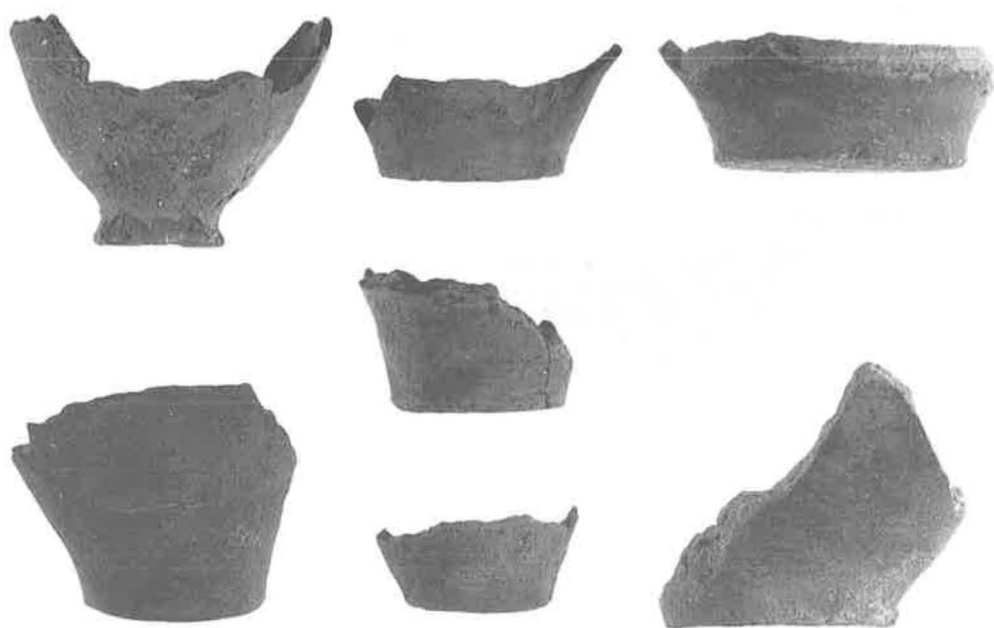
1. 調査地断面



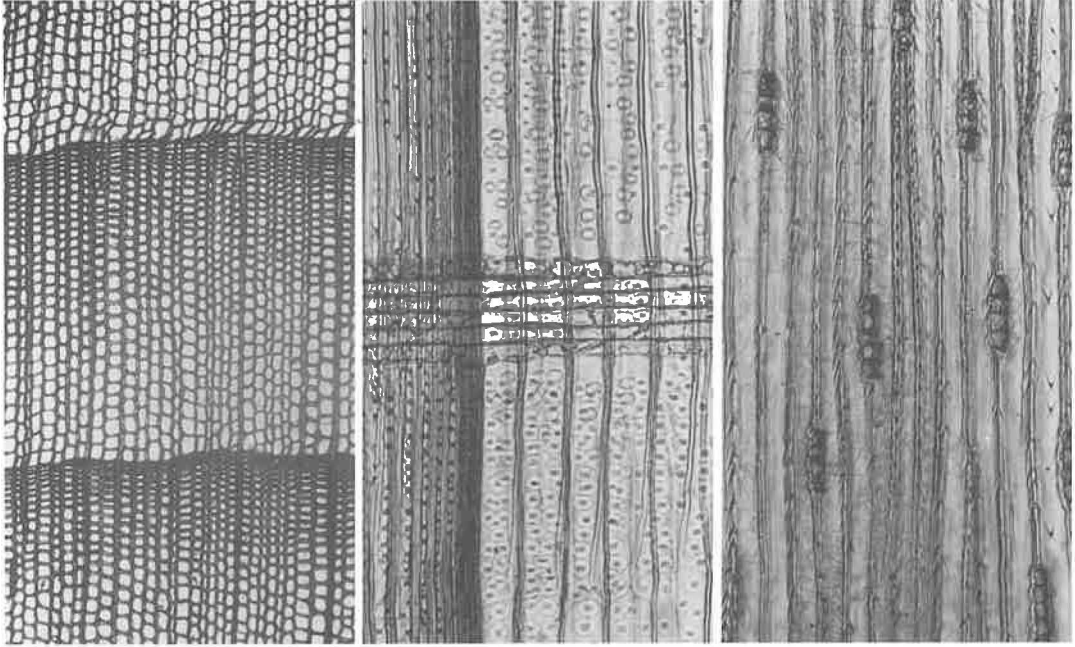
2. 調査地断面



1. 弥生土器 甕・壺・蓋



2. 弥生土器 底部

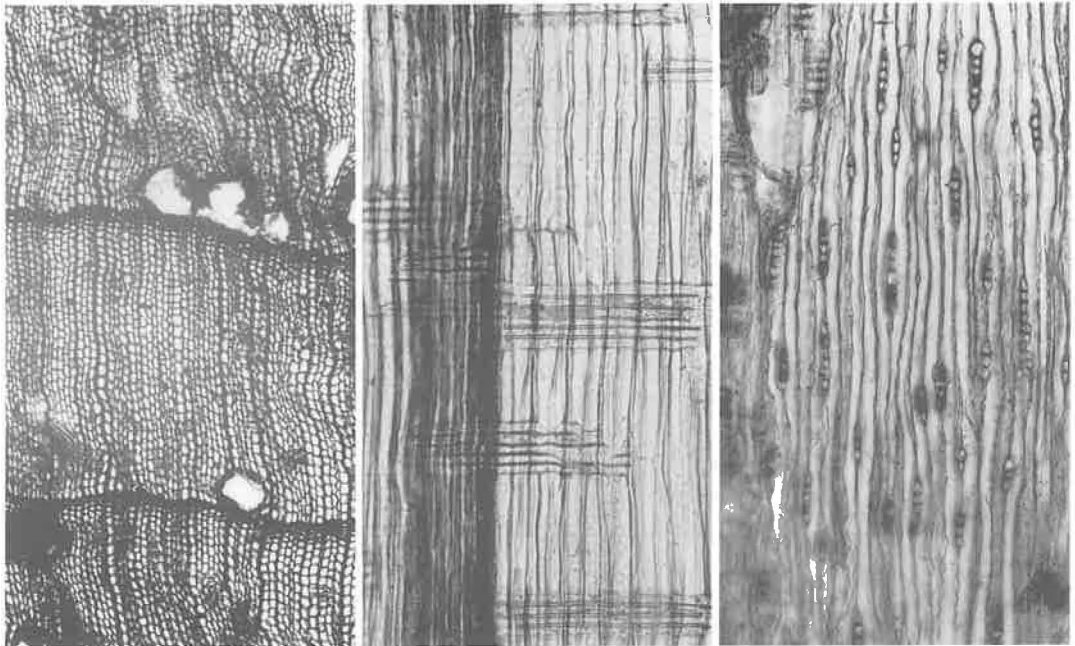


木口 ×40

柁目 ×100

板目 ×100

*Sciadopitys verticillata* KTR-31 木棺 ふた板



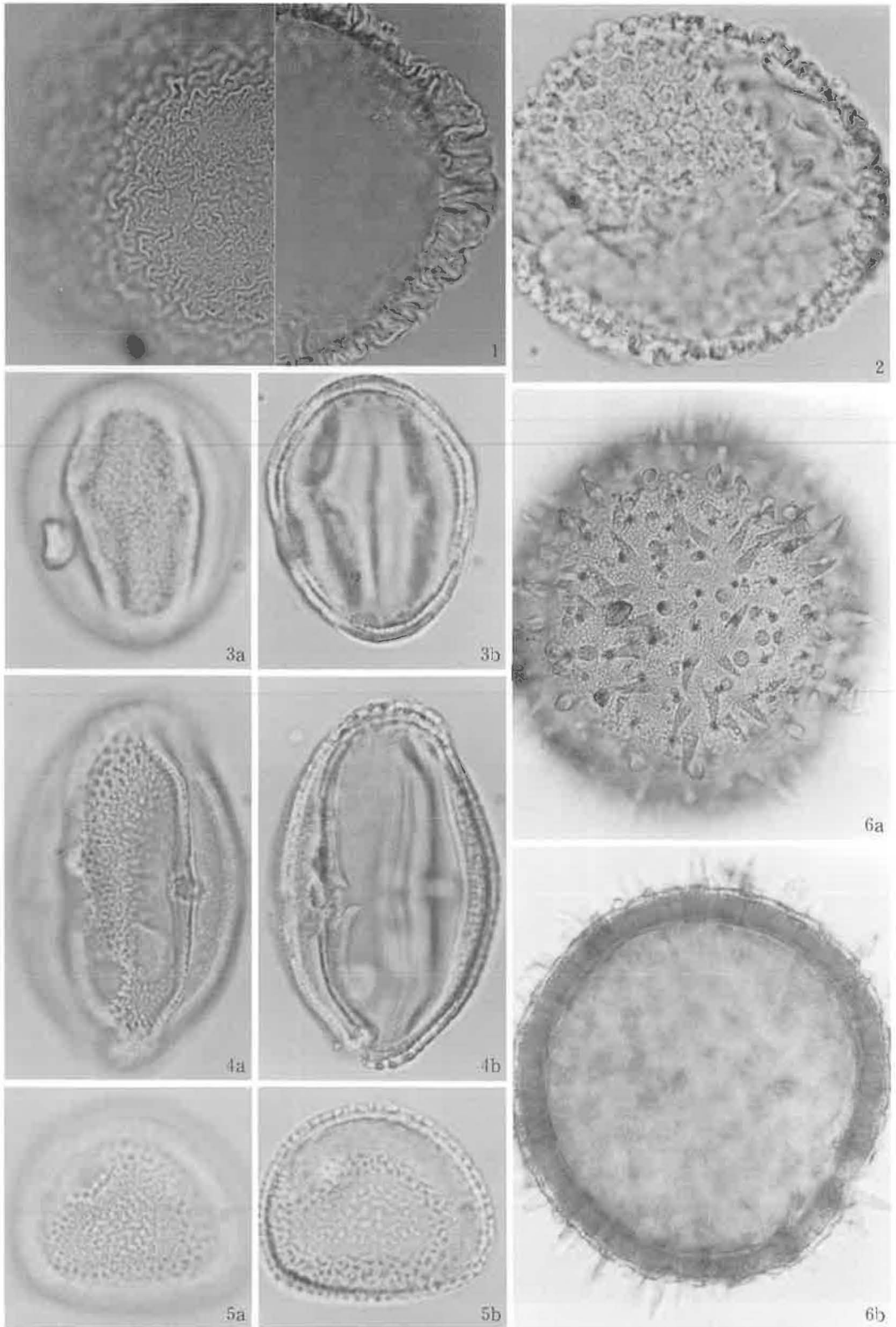
木口 ×40

柁目 ×100

板目 ×100

*Chamaecyparis* sp. KTR-31 木棺 小口板

図版 10  
花粉顕微鏡写真



1	ツガ属	4 a・b	ツタ属
2	コウヤマキ属	5 a・b	ガマ属
3 a・b	アカガシ亜属	6 a・b	ワタ属近似種 1

100 $\mu$ (1, 6)

50 $\mu$ (2-5)

鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告

平成2年3月31日

発行所 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷所 ドウミ印刷広研社